

北海道蘭越町立川1遺跡第2次・3次調査概報

長崎潤一・高倉 純・北村成世・阿部嵩士・高林奎史

はじめに

北海道蘭越町立川遺跡は1958・1959年に当時函館博物館の吉崎昌一によって発掘調査がなされた縄文時代草創期～旧石器時代の遺跡である。吉崎昌一は遺跡名を冠した「立川ポイント」を提唱し、立川遺跡調査は細石刃石器群と有舌尖頭器石器群が併存するの否かという議論の出発点となった(吉崎 1960)。

長崎は2017年に羊蹄山周辺でのローム層露頭調査、畑地での旧石器遺跡発見を目的とした踏査を行った。また高倉は2016年以降ニセコ町西富遺跡での発掘調査を行ってきた(高倉・鈴木 2017)(高倉 2018)。両名で何度か蘭越町立川遺跡を訪問し、再発掘を行って現代的な研究視点で立川遺跡を検討したいと考えてきた。

2022年3月に文部省科学研究費獲得の目途が立ち、すぐに同年4月末から立川遺跡第1次調査を実施した(長崎・高倉・北村・田畑・谷川 2023)。

これに引き続き2022年10月～11月に第2次調査を実施し、さらに2023年4月～5月に第3次調査を行った。本稿はこの第2次・第3次調査の概報である。

3回の調査で有舌尖頭器石器群の製作址、蘭越型細石刃石器群の石刃核・細石刃核ブランク集中、無紋土器破砕片集中が見つかった。また1958・1959年吉崎昌一調査区と思われる箇所を確認した。第1次・第2次調査では無紋土器は耕作土からの出土であるが、第3次調査で土器集中出土地点の10m北側で耕作土の下位に縄文包含層と考えられる黒色土層が残存している状況が確認され、今後の調査で本来の包含層で相伴石器を確認できる可能性も出てきた。

また2022年12月には函館市博物館に所蔵されている1958・1959年調査の立川遺跡資料について長崎・高倉・北村が実見し、両者の比較研究も開始した。

なお本稿は2022～2024年度文部省科学研究費補助金基盤(C)(研究代表者:長崎潤一・研究分担者:高倉純「細石刃石器群から有舌尖頭器石器群への石器群編成のダイナミズム」)の研究成果の一部である。

1. 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

第1次調査の際は積雪が15cm程あり、クマザサも繁茂していたため地形の把握が困難であった。そのため第2次調査を行う際に、現地の地形を再度確認したところ台地の平坦面が予想よりも南に広がることが確認された。台地の平坦面である南方向と、台地の先端部である北東方向への発掘区拡張、設定に伴い、グリッド名A1よりも南東方向へ拡張する場合にはアルファベットが(A、ZZ、ZY…ZA、YZ…)と変化し、A1よりも北東方向へ拡張する場合には(1、0、-1、-2…)と変化するようにグリッドの設定を改めた(図1)。なおグリッドの大きさ(1m×1m)、方角は第1次調査に準拠した。

掘削は第1次調査と同じく、表土から人力で行い、遺物包含層が検出された際は、3mmメッシュの乾ふるいにかけた。埋め戻しは、壁面をブルーシートで保護し土嚢を敷き、その上を掘削土で充填した。写真撮影は作業前、遺物取り上げ時、掘削終了後に適宜撮影した。

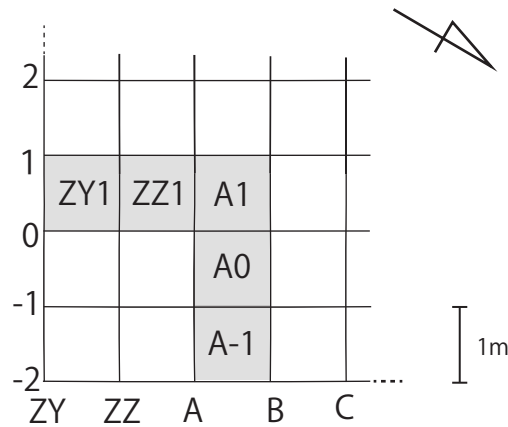


図1. グリッドの呼称

(2) 調査の経過

第2次調査

- 10月21日 北大調査隊、朝出発。午後は機材搬入・草刈、調査区周辺の整備。早稲田調査隊、北海道到着。
- 10月22日 既知点W1、W2の杭の確認。第1次調査の際に設定した発掘区(斜面部)の確認。A30の拡張区の設定(B30)。AB20、AB30の掘り下げ開始。遺物の出土を確認。
- 10月23日 発掘作業の継続。ZO73、83の発掘開始。A20より黒曜石製の有舌尖頭器の基部が1点出土(図4-2)。

北海道蘭越町立川1遺跡第2次・3次調査概報

- 10月24日 発掘作業の継続。A20より黒曜石製のスクレイパーの刃部が1点（図4-3）、B20より頁岩製の石刃が1点（図4-4）出土。
- 10月25日 発掘作業の継続。
- 10月26日 発掘作業の継続。
- 10月27日 発掘作業の継続。ZE73, YV73の発掘開始。
- 10月28日 発掘作業の継続。YV73の耕作土を掘り下げたところ、畑のうねを検出。
- 10月29日 発掘作業の継続。A30南壁より頁岩製の有舌尖頭器が出土（図4-1）。機材撤収作業の実施。
- 10月30日 早稲田隊、帰京。

第3次調査

- 4月29日 北大調査隊、札幌朝出発。昼前に蘭越町教育委員会へ挨拶。午後は機材搬入・草刈・A1調査区周辺の拡張調査区設定と表土掘削・A20B20区調査区周辺の拡張調査区設定。早稲田調査隊、北海道に到着。
- 4月30日 現地の現状を確認後、機材の搬入。A1、A20の区を拡張（拡張に伴い区の名称を変更：A1→A1拡張区）、新たに拡張した区の杭を測量（新たに拡張した区：A0, A2, ZZ0, ZZ1, ZZ2 A19, B19, C19, C20）。A, ZZ0. 1. 2より細石刃1点、A, B, C19. 20より細石刃1点が出土（図8-7）。
- 5月1日 発掘作業を継続。新たに試掘区の設定（ZO63, ZE63, YV63, ZO53, ZE53, ZA53）。A2の2層から3層にかけて頁岩製の石刃核が出土（図9）。付近にもう1点の石核を確認。
- 5月2日 発掘作業を継続。B-19の2層より黒曜石製有舌尖頭器（図6-1）、頁岩製の彫器（図7-6）が出土。第2次調査の際に設定した試掘区（YV73, YV83）の発掘を開始。第2次調査に引き続きZO73, ZE73を掘り下げ。
- 5月3日 発掘作業を継続。YV83より頁岩製の細石刃（図8-10）が出土。YV83においては3層が60cm以上あることから、舌状の台地の先端部と背後の緩斜面では堆積が異なることを確認。A20拡張区より黒曜石製の細石刃（図8-8）が出土。
- 5月4日 発掘作業を継続。A1拡張区をさらに拡張。ZY0, ZY1, ZY2を設定。新しく設定したZA-53が木の影響で発掘困難であったためZA54に発掘区を再設定。5月1日に確認した石核が石刃核であることを確認（第10図）。さらに付近にて石核をもう1点確認。A1拡張区より細石刃が1点出土（第8-11）。
- 5月5日 発掘作業を継続。午前は雨天であったため、午後から発掘開始。
- 5月6日 発掘作業を継続。A10拡張区より頁岩製の尖頭器の先端部1点（図6-4）、黒曜石製

の有舌尖頭器の基部2点(図6-2)(図6-3)が出土。

- 5月7日 発掘作業を継続。5月4日に確認した石核が石刃核であることを確認(図11)。A1拡張区から吉崎トレンチを確認。A10拡張区壁面より頁岩製の両面加工石器が出土(図7-5)。
- 5月8日 発掘作業を継続。レイアウトナビゲーターによる点群測量の開始。
- 5月9日 発掘作業を継続。レイアウトナビゲーターによる点群測量の継続。A1拡張区より黒曜石製の細石刃が出土(図8-9)。
- 5月10日 レイアウトナビゲーターによる点群測量の継続。機材撤収作業を実施。
- 5月11日 北海道大学へ発掘機材等を運搬。早稲田隊、帰京。

2. 調査の成果

(1) 地形の把握

前年度は、遺跡を包含する台地の地形確認のため、ドローンを用いた空撮とフォトグラメトリによって3Dモデルを作成し、等高線図を作成した(図2)。しかし、部分的な残雪や群生したクマザサ等によって、航空写真を用いた地表面の測量が正確でないことが想定され、微地形の把握には至らないと考えられた。そのため、本年度はTOPCON社製の「Layout Navigator」(以下「LN」と略)を用いたデジタル三次元測量を行った。

LNは2つの既知点を登録することで後方交会を行い、機械点を算出する。その後、任意の点に置かれたミラーへの測距によって、その点の座標を記録することができる。また、登録された座標はCSVファイルとして出力が可能である。本年度の地形図の作成は、LNによって測量され、座標を持つ点群データを基として、Esri社のArcGISを用いた解析によって行った。

本年度新たに測量した地形図(図3)と前年度の地形図(図2)を比べると、台地先端部の地形変換点がいずれも手前に来ており、単純な形を成していることが分かる。また、地形図南側に緩斜面が表れていること、北西にはE字を成す谷地が見られるが、複雑に開析谷が入り込む地形であることが分かった。

全体として、前年度実施されたドローンによる空撮とフォトグラメトリによる測量は、台地全体の大まかな地形を把握していることが分かった。一方で、台地縁辺部の地形は想定通り、クマザサと残雪を反映したものとなっており、本来の地表面よりも高い面で等高線が引かれていたことが分かった。また、本年度実施されたデジタル3次元測量によって、地表面の座標を取得したため、舌状台地の詳細な地形の把握が可能となった。

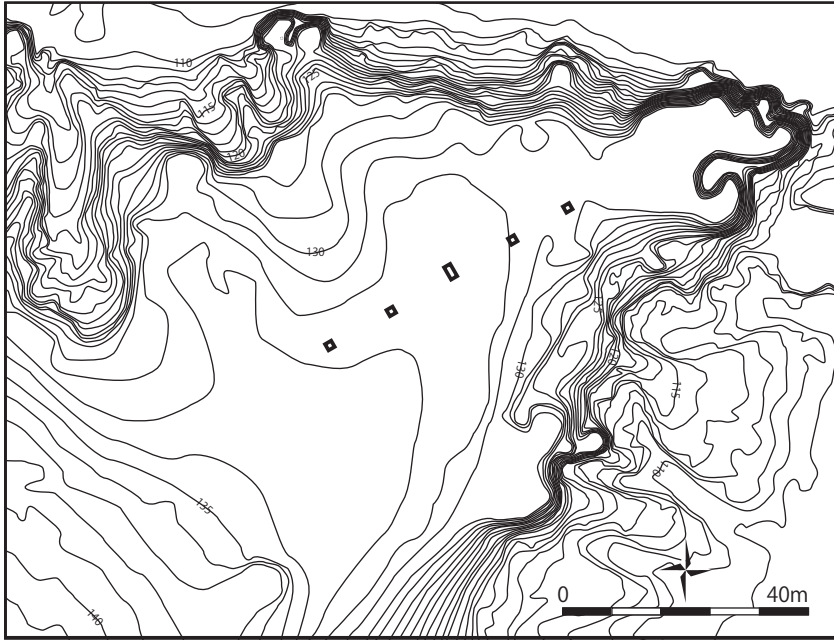


図2. 修正前の等高線図

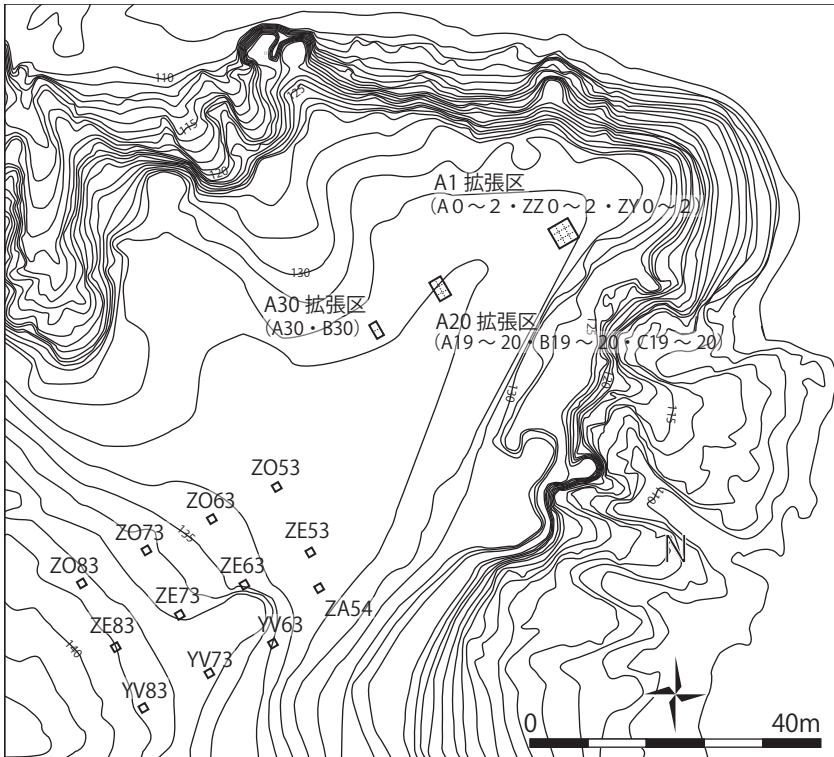


図3. 修正後の等高線図および発掘調査区

(2) 層位

ここでは、深く掘り下げた発掘区の層位を記載する。第1次調査により明らかとなったA1北壁の層位を参考に、改めて確認できた層を追加して記述している。

1層：黒褐色表土層 (7.5YR 3/1)。粘性が弱く、しまりは弱い。クマザサによる浸食が見られる。

2層：暗褐色土層 (7.5YR 3/4)。粘性がやや弱く、しまりは弱い。1mm～6mm程度のローム粒が見られる。3a層との境界は不整合。耕作土と考えられる。遺物出土。

3a層：黄橙色ローム層 (7.5YR 7/8)。粘性がやや強く、しまりはやや弱い。赤、白、黒のスコリアを少量含む。全体はハードロームであるが、上部はソフト化している。ハードロームとソフトロームがまだら状に混じっており、氷河性の土壌攪乱が起きたと考えられる。上部から中部にかけて遺物出土。

3b層：黄橙色ローム層 (7.5YR 7/8)。粘性がやや強く、しまりは弱い。4層の黄色火山灰を含む。混じる火山灰の粒子は上方へ向けて減少する。4層との境界は凹凸が激しい。火山灰の削剥が起こっていたと考えられる。

3c層：明褐色ローム層 (7.5YR 5/8)。粘性がやや弱く、しまりはやや弱い。3b層と比べ、4層由来の黄色火山灰が多く含まれる。黒色粒子が少量点在する。

3d層：黄褐色ローム層 (10YR 5/6)。粘性がやや弱く、しまりはやや弱い。4層由来の黄色火山灰が多く含まれる。5層由来の褐色ロームブロックがまだら状に含まれる。

3e層：にぶい黄褐色ローム層 (10YR 6/4)。粘性がやや弱く、しまりはやや弱い。4層由来の黄色火山灰を多量に含む。黒色粒子が点在する。

4層：黄色火山灰層 (2.5Y 7/8)。粘性が弱く、しまりはやや強い。黒褐色の粒子を含む。最下層に明褐色シルトの火山灰の薄層 (厚さ7mm～10mm) が堆積。ワンフォルムユニットの中で変化したのと考えられる。

5層：褐色ローム層 (7.5YR 4/3)。粘性が強く、しまりはやや強い。1mm程度の黒スコリアを微量含む。3層と比べやや暗い。

6層：橙色土層 (7.5YR 6/8)。粘性が強く、しまりは弱い。10mm程度の安山岩の角礫を含む。5層のロームに7層の砂礫が混じったもの。

7層：にぶい橙色砂層 (7.5YR 7/4)。粘性がやや強く、しまり弱い。10mm～60mm程度の安山岩の角礫を含む。各層5～20mmの厚さのラミナ状堆積。

以上が今回確認できた層位である。第1次の報告と相違なく、函館市博物館報告の上部ローム層が3a・3b層に、下部ローム層が5・6層に対応すると考えられる。今回の調査によって、台地の先端部だけでなく、台地の緩斜面側 (南西側) の層位を確認することができた。緩斜面側では、台地先端部 (A1やA30・B30) と比較すると層が厚く堆積することが分かった。特に

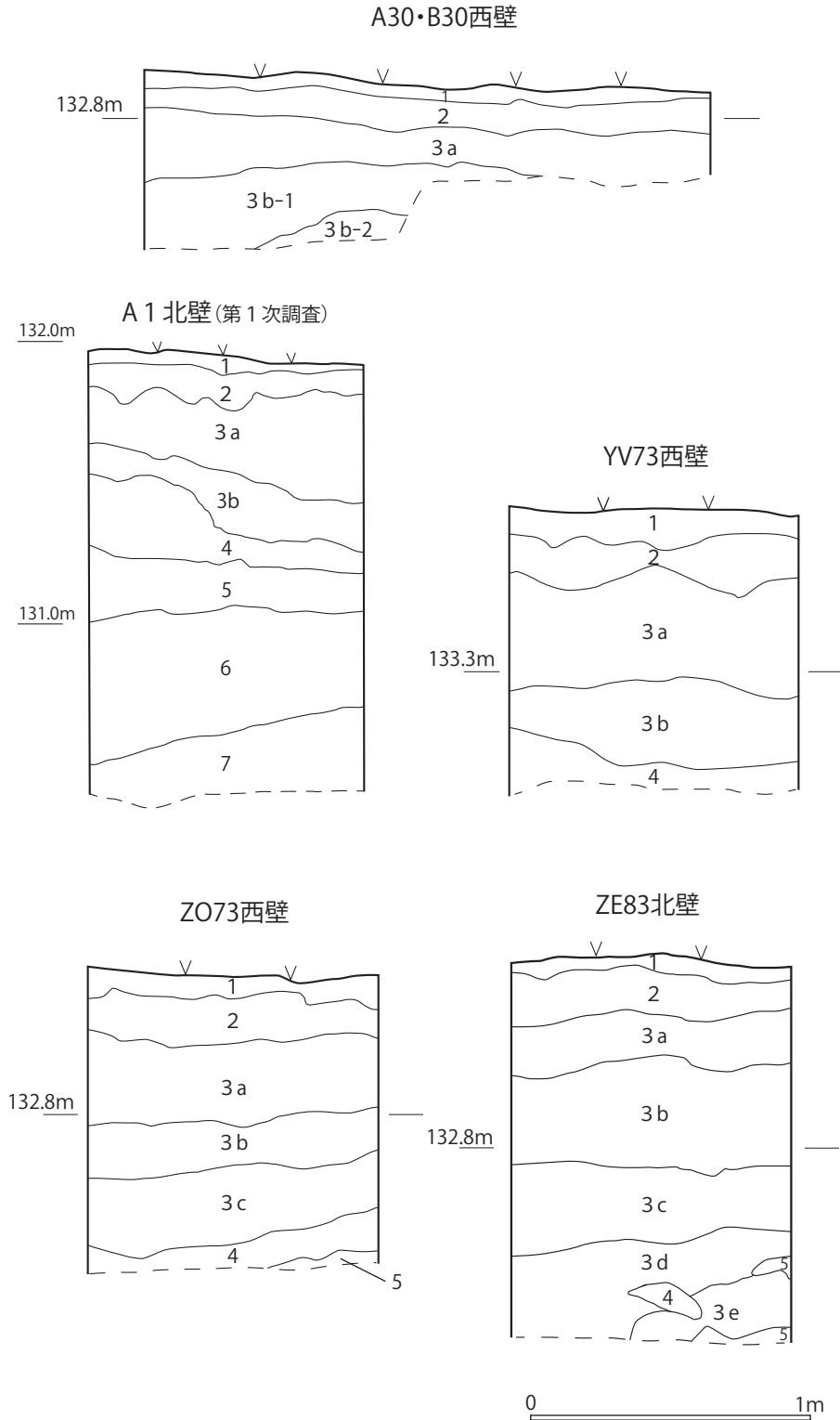


図4. 発掘区のセクション(1)

YV83東壁・南壁

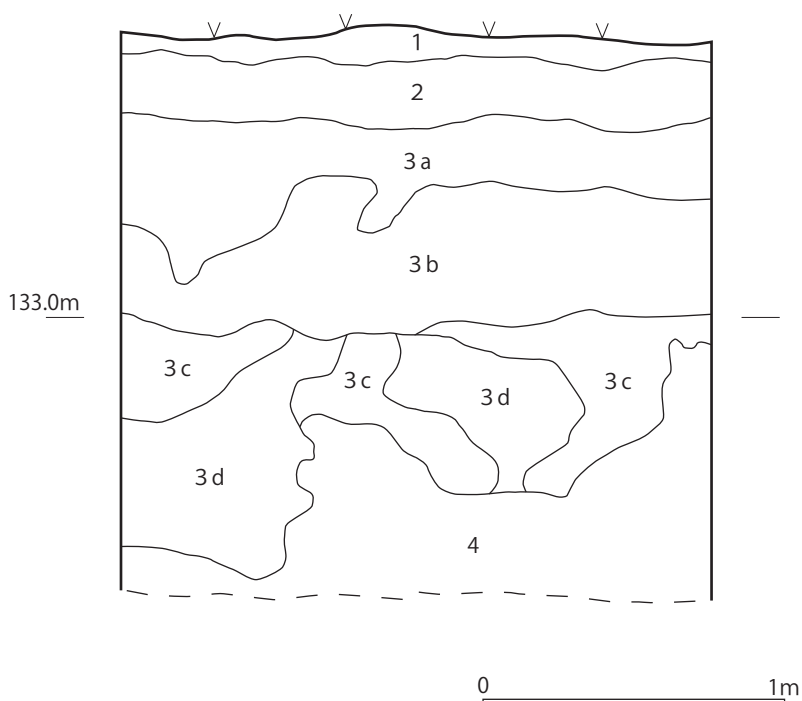


図5. 発掘区のセクション（2）

YV83においては3層が非常に厚く、4層との接触面も乱れていることが明らかとなった。YV83周辺において、舌状台地を北東と南西で分かつように、谷状の地形が南東から北西方面へと存在していた可能性がある。また、遺物包含層である3層が谷状の地形による二次堆積によるものか検討する必要がある。周辺の調査を続け、古地形の復元に努めたい。

(3) 出土遺物

第2次調査

第2次調査では、A20拡張区、A30拡張区、ZO73、ZO83、YV73、ZE73から石器402点、土器6点が出土した。

土器の詳細については本報告に譲り、本稿では石器について報告する。第1次調査と同様に大半がチップ（碎片）、剥片であったが、有舌尖頭器、石刃、スクレイパーなども確認することができた。各調査区の組成は以下の表の通りである（第1表）。なお前回の第1次調査の概報に引き続き、二次加工のない石器で1cmを超えるものを剥片とし、1cm未満のものをチップ（碎片）としている。主要な石器である4点を図示した（図6）。

第6図-1は有舌尖頭器である。A30グリッド3層より出土。石材は頁岩である。上部と舌部の一部が欠損している。身部は表裏両面が丁寧に調整されている。舌部の左側に部分的に潰れ痕が認められる。

第6図-2は有舌尖頭器の基部である。A20グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。有舌の基部であり、末端部も欠損している。表面は丁寧な調整が施されているが、裏面においてはそれほど細かい調整は見受けられない。

第6図-3はスクレイパーの刃部である。A20グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。急斜度な二次加工が連続的に施されている。刃部のみであるため全体形状は不明。

第6図-4は石刃である。B20グリッド3層より出土。石材は頁岩である。両端を欠損している。左側縁においては二次加工が認められる。裏面は節理面である。裏面左側面においても剥離が見受けられるが、ガジリの可能性もある。

第3次調査

第3次調査では、A1拡張区、A20拡張区、ZE-53、ZE-63、ZE-73、ZO-73、YV-83から石器660点が出土した。第1次、2次調査と同様に大半がチップ（碎片）、剥片であったが、石刃核や有舌尖頭器、細石刃なども確認することができた。各調査区の組成は以下の表の通りである（第2表）。なお前回の第1次調査の概報に引き続き、二次加工のない石器で1cmを超えるものを剥片とし、1cm未満のものをチップ（碎片）としている。主要な石器である16点を図示した（図6から図11）。石核3点については3次元データを元に作成した。

第7図-1は有舌尖頭器である。A20拡張区（B19）2層出土。石材は黒曜石である。左右非対称を呈する。右側縁は表裏面から細かな調整が施されているが、左側縁裏面は先端部のみに細かな調整が施されている。舌部の両側縁には潰れ痕が認められる。

第7図-2は有舌尖頭器の基部である。A20拡張区（A19）3層出土。石材は黒曜石である。両側縁は磨かれ潰れている。底部は原礫面を有する。

第7図-3は有舌尖頭器の基部である。A20拡張区（A19）3層出土。石材は黒曜石である。両側縁は磨かれ潰れている。被熱によるヒビが観察される。

第7図-4は尖頭器の先端部である。A20拡張区（C20）3層出土。石材は頁岩である。両面加工の尖頭器の先端部であり、全体的な形状は不明。両側縁は細かい剥離による調整が施されている。

第8図-5は両面加工石器である。A20拡張区（C19）3層出土。石材は頁岩である。全周に渡って加工が施されている。表面上端部右側においては背面から表面にかけて細かい調整加工が施される。加えて、背面右縁辺においては表面から背面にかけて細かい調整加工が施される。

第8図-6は彫器である。A20拡張区（B19）2層出土。石材は珪化度の高い頁岩である。全周

渡って細かな調整加工が腹面から背面にかけて加えられている。右側縁の上部に加工を施しそこを打面として1枚の削片を剥離し、左刃の彫刀面を作出している。

第9図-7は細石刃である。A20拡張区（A2）2層出土。石材は黒曜石である。両端を欠損している。形状から忍路子型細石刃核から作出されたと想定される。

第9図-8は細石刃である。A20拡張区（C20）2層出土。石材は黒曜石である。両端を欠損している。形状から忍路子型細石刃核から作出されたと想定される。

第9図-9は細石刃である。A1拡張区（ZY2）3層出土。石材は黒曜石である。上部は欠損している。形状から忍路子型細石刃核から作出されたと想定される。

第9図-10は細石刃である。YV-83より出土。石材は頁岩である。末端部は欠損している。作業面調整が施されている。

第9図-11は細石刃である。A1拡張区（ZY0）2層出土。石材は頁岩である。末端部は欠損している。やや幅が広く、蘭越型細石刃核から作出されたと想定される。

第9図-12は石刃である。A20拡張区（C20）3層出土。石材は頁岩である。末端部は欠損している。表面右側一部は原礫面である。頭部調整が施されている。背面は同一打面からの剥離で構成されている。

第10図-13は石刃核である。A1拡張区（A2）2層から3層にかけて出土。石材は頁岩である。13枚の石刃剥離面を持つ。楕円状を呈する打面を持ち、打面・作業面には調整加工が施される。石核下端部にも調整が行われ、下端部を打点として石刃剥離が行われている箇所がある。ほぼ全周にわたって石刃剥離が行われ、石核全体は円錐状の形状を呈している。金属との接触痕が見られる。

表1. 第2次調査出土遺物表

	有舌尖頭器	石刃	細石刃	彫器	スクレイパー	石核	両面加工石器	削片	チップ	礫	土器	計
A20拡張区	2	1	0	0	1	0	0	116	260	0	0	380
A30拡張区	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	6	8
ZE-73	0	0	0	0	0	0	0	5	7	4	0	16
ZO-73	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
YV-73	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
ZO-83	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
合計	2	1	0	0	1	0	0	124	270	4	6	408

表2. 第3次調査出土遺物表

	有舌尖頭器	石刃	細石刃	彫器	スクレイパー	石核	両面加工石器	削片	チップ	礫	土器	計
A1拡張区	0	0	3	0	0	3	0	28	59	10	0	103
A20拡張区	4	1	2	1	1	0	1	124	402	7	0	543
ZE-73	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	4
ZO-73	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
YV-83	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2
ZE-53	0	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	5
ZE-63	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
合計	4	1	6	1	1	3	1	160	466	17	0	660

第11図-14は石刃核である。A1拡張区（A2）3層から出土。石材は頁岩である。3枚の石刃剥離面を持つ石刃核である。打面・作業面には調整加工が施され、縁辺が磨かれている箇所がある。石刃核下端部には、剥離される石刃が先細りする形状になるよう、石核の正面形状がV字を呈すように加工が入れている。打面・作業面・下端部以外は原礫面であることから、板状の素材が用いられていたことが分かる。

第12図-15は石刃核である。A1拡張区（A2）3層から出土。石材は頁岩である。4枚の石刃剥離面を持つ石刃核である。涙滴状を呈する打面を持ち、打面・作業面には調整加工が施されている。背稜は両面加工が施されている。形態から蘭越型細石刃核のブランクであると考えられる。

（4）遺物分布

遺物分布は以下の通りである（図13・図14）。A1拡張区においては分布がまとまった状態で石核が3点出土した他、剥片が約50点、チップが約30点出土した。A20拡張区においては第1次調査に引き続き、小さい剥片やチップが多量に出土している。第3次調査に伴い新たに拡張区を設けたがブロック全体を検出するには至らなかった。また土器が出土していたA30では、B30を拡張し、土器が出土している。新たに区設定を行い、発掘した舌状台地の背後の緩斜面においては安山岩製や頁岩製の石器が半数以上を占める割合で確認された。またYV-83においては頁岩製の細石刃も確認されている。

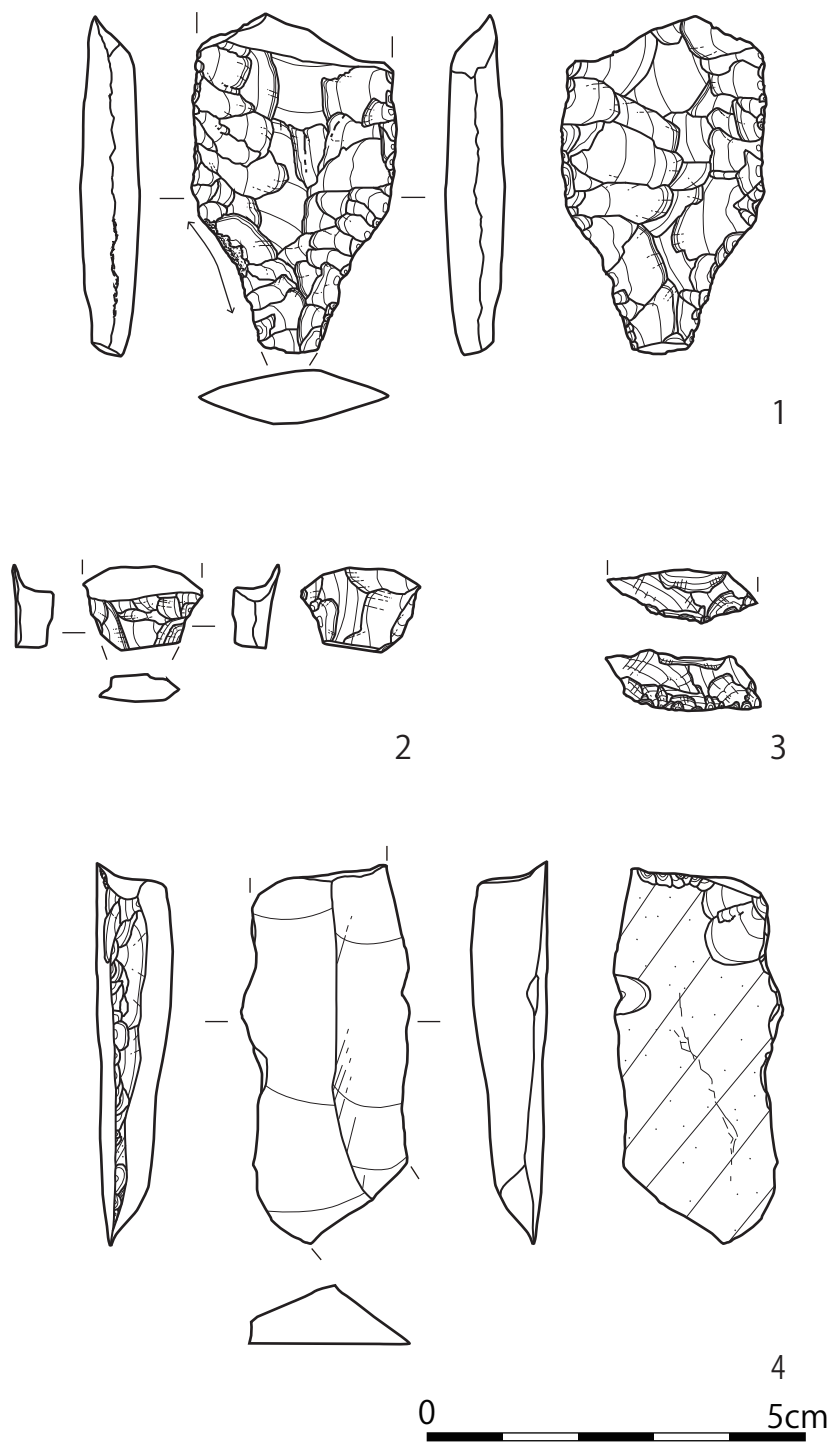


图 6. 出土石器实测图 (1)

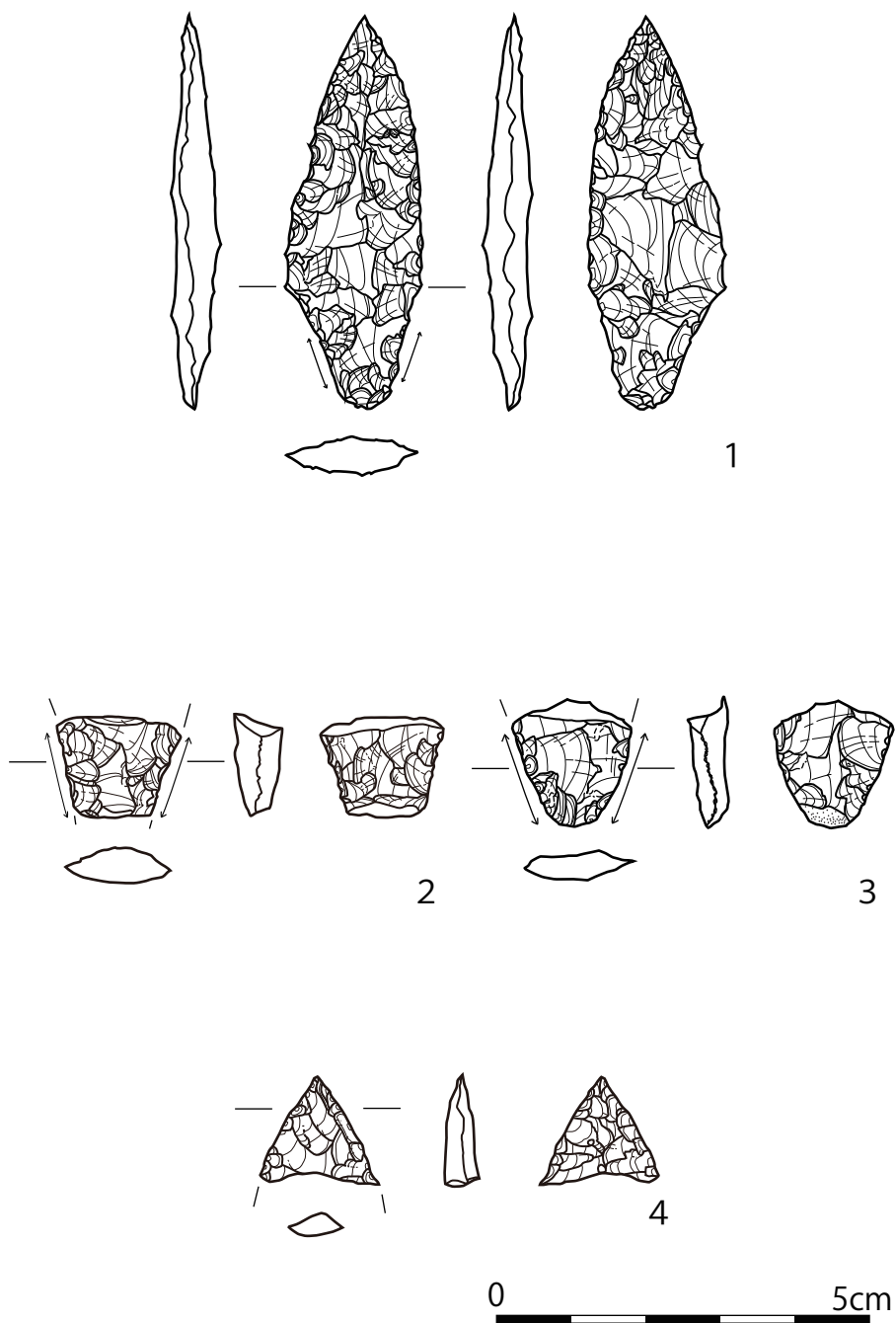
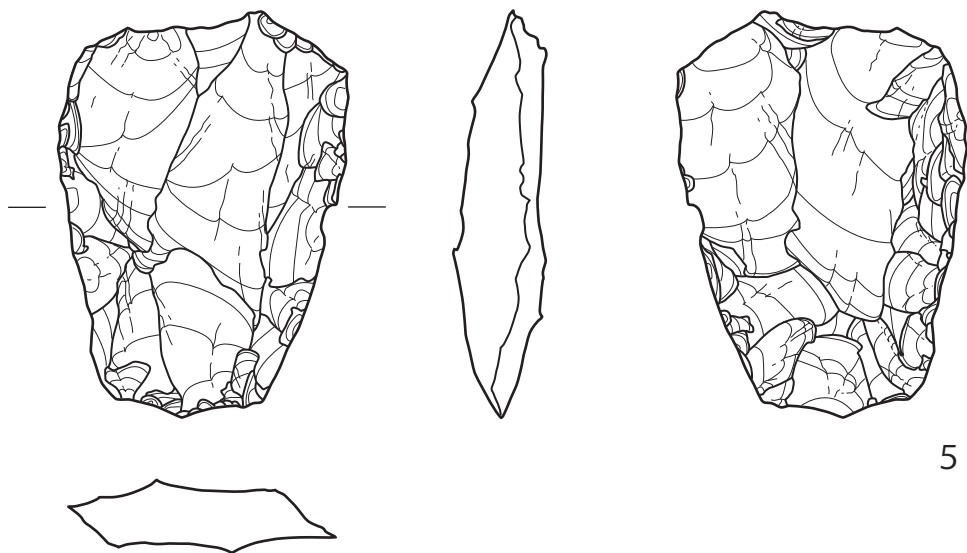
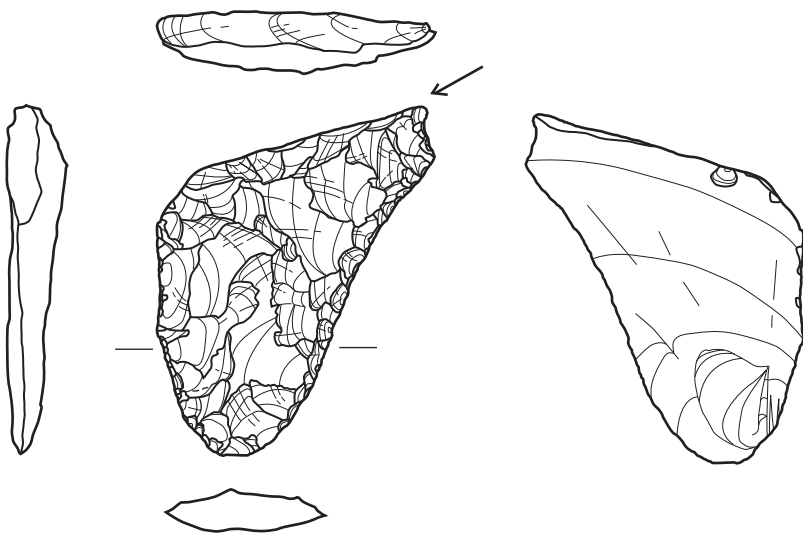


図7. 出土石器実測図(2)



5



6

0 5cm

A horizontal scale bar is located at the bottom right of the page. It consists of a solid black line with a white segment at the left end. The number '0' is positioned at the left end, and the number '5cm' is positioned at the right end.

图 8. 出土石器实测图 (3)

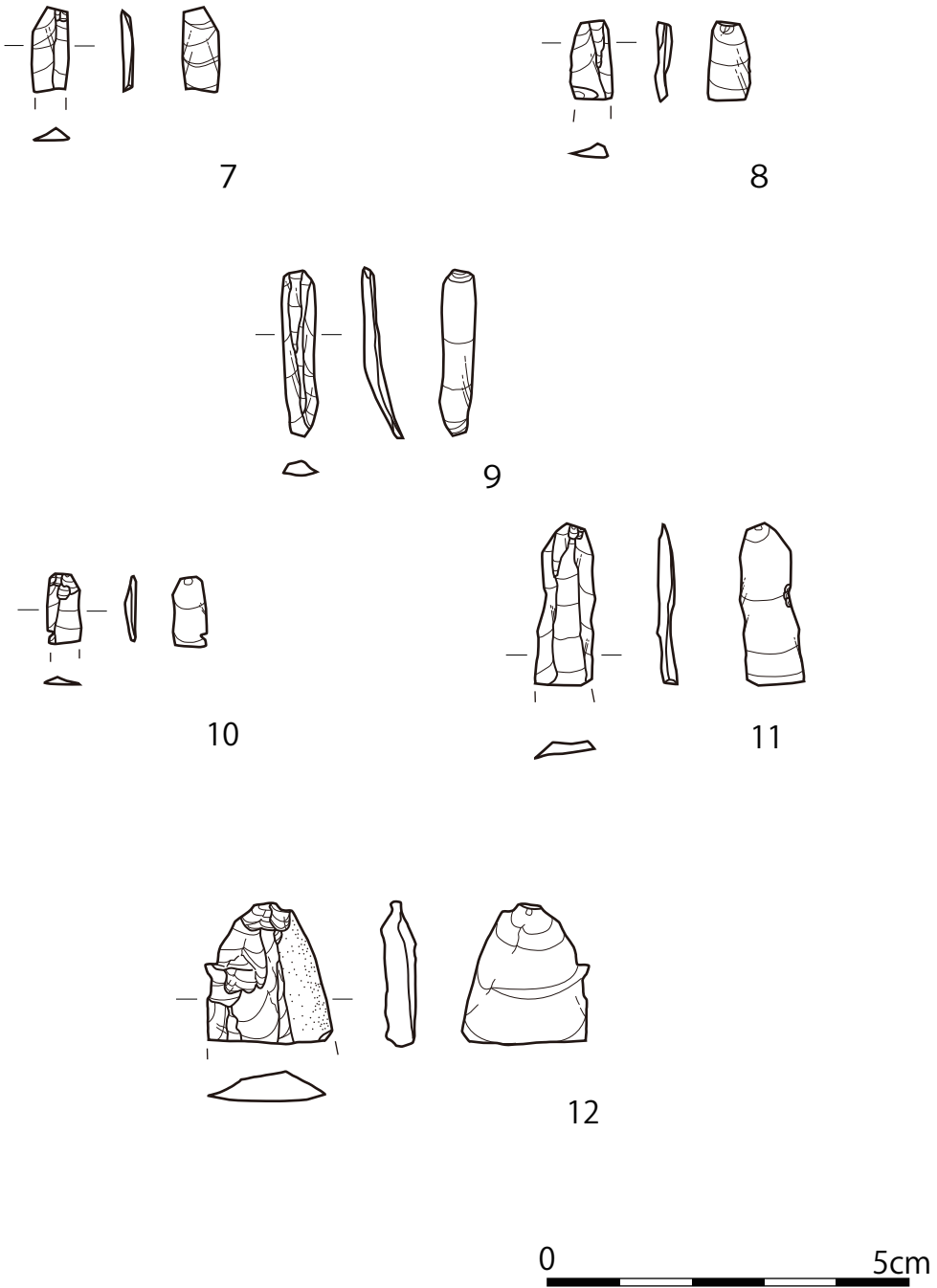


図9. 出土石器実測図(4)

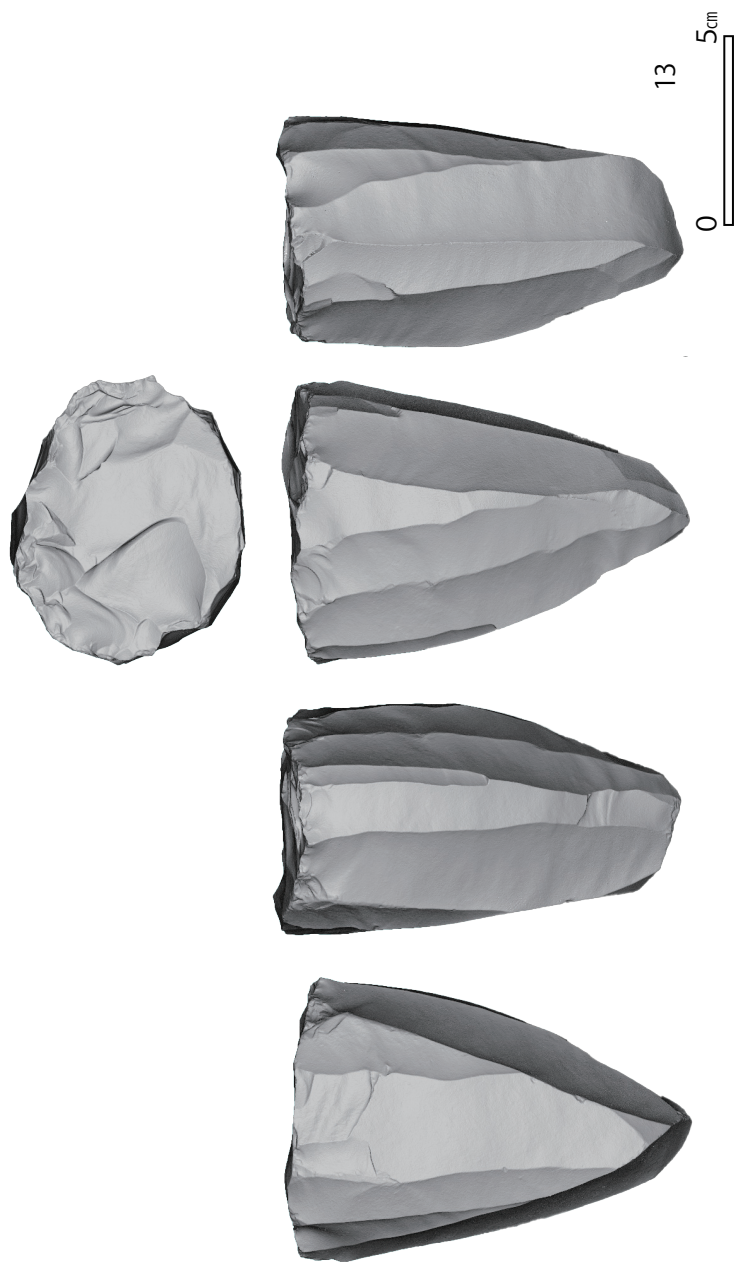


图10. 出土石核 3D (1)

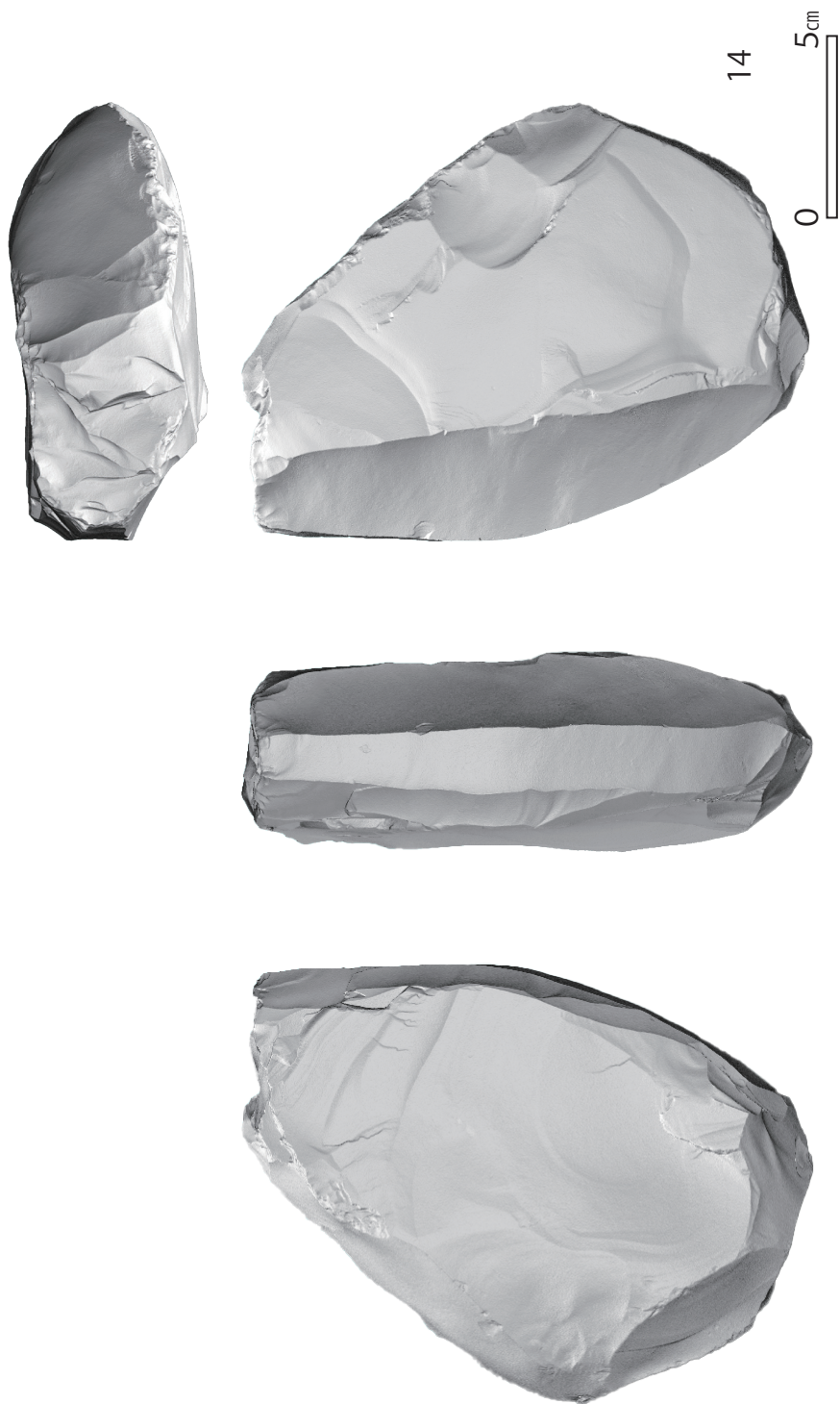


図11. 出土石核 3D (2)

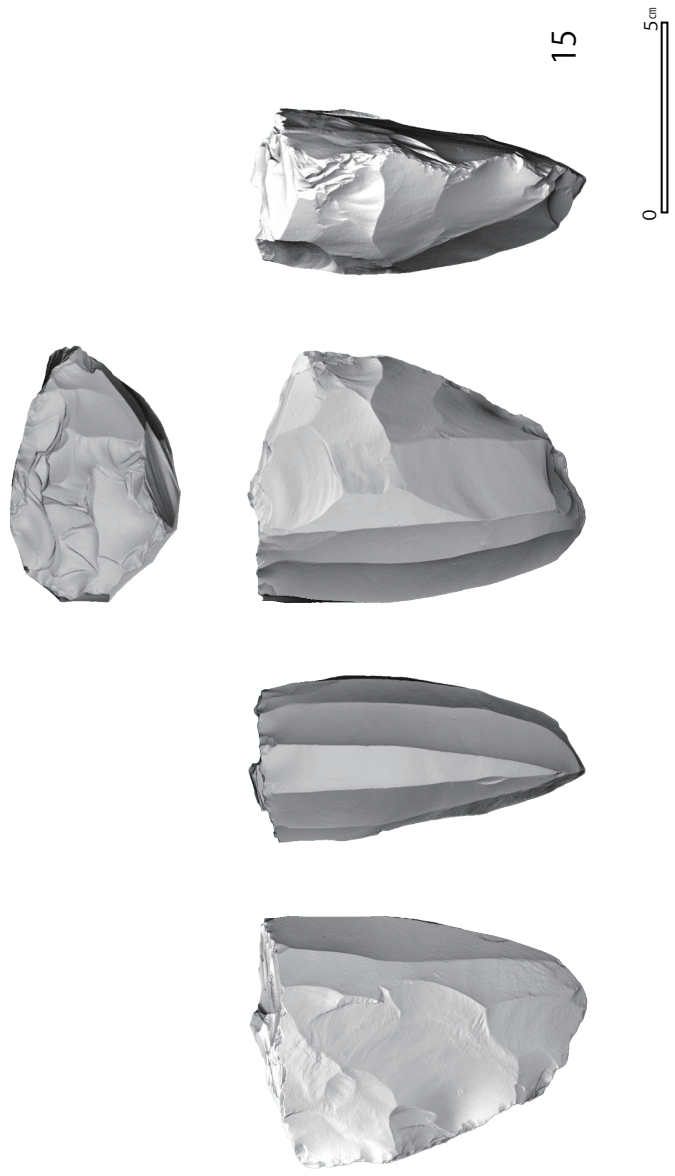


图12. 出土石核 3D (3)

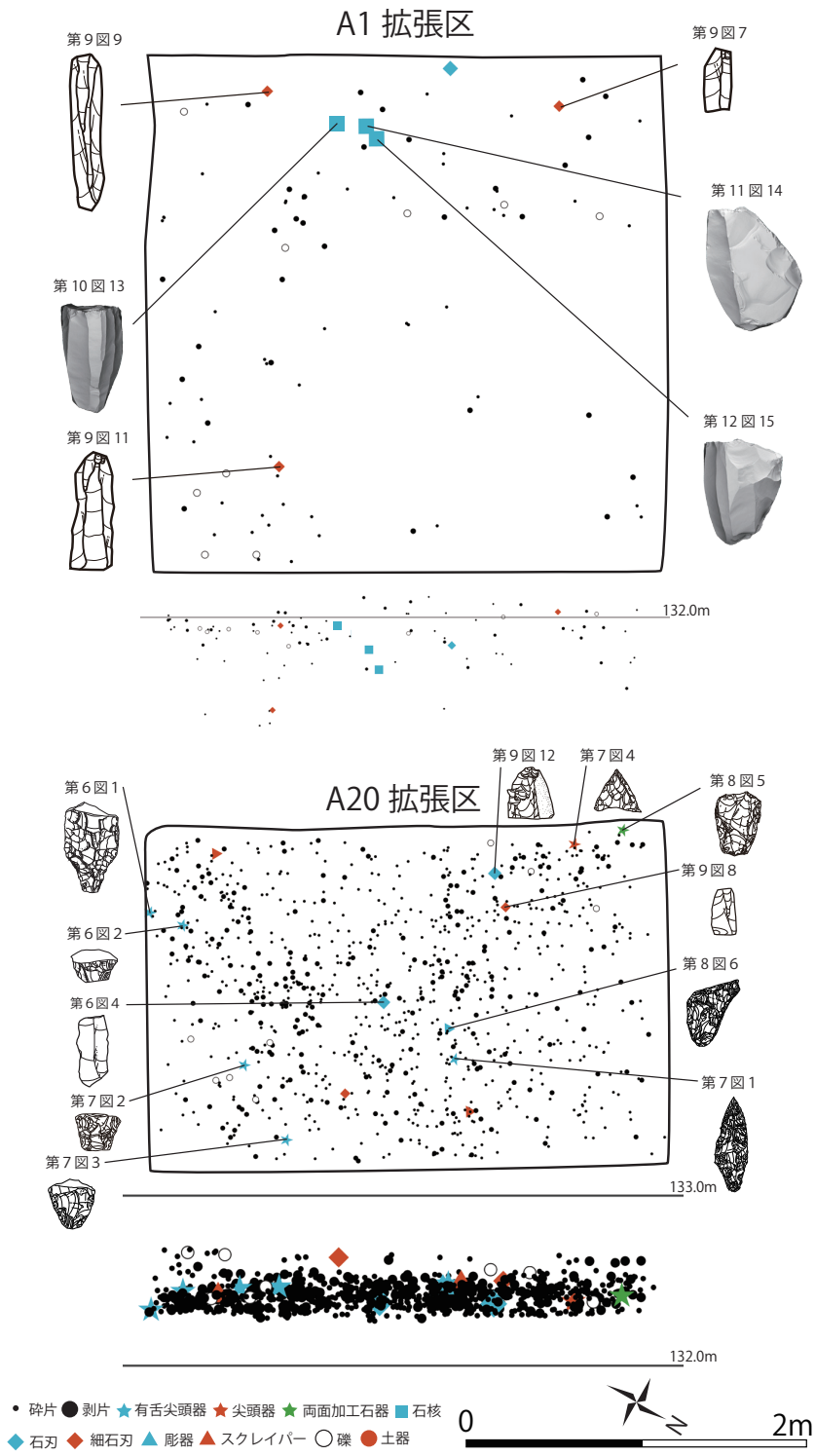


図13. 出土石器分布図 (1)

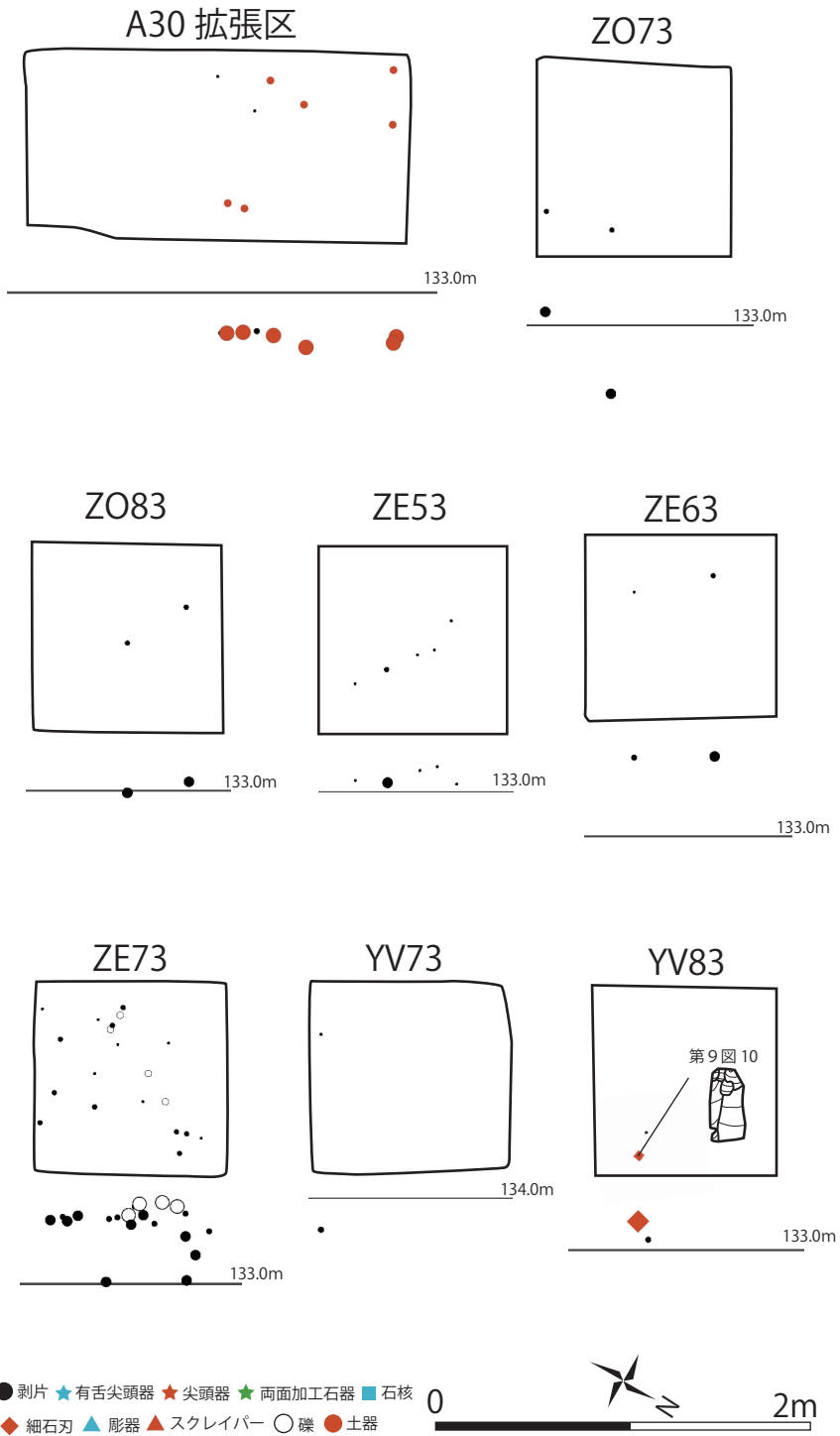


図14. 出土石器分布図（2）

3. 今後解明すべき学術的課題

本調査では、石刃核や有舌尖頭器をはじめとして石器1062点、土器6点が出土した。ここでは、それらの成果を踏まえて、今後解明すべき学術的課題について考えていきたい。

(1) 石器出土分布の確認

第1次調査を踏まえ、舌状台地の背後の緩斜面にも試掘坑を設定した。結果、舌状台地の先端部だけでなく、舌状台地の背後の緩斜面にも分布が広がることが明らかとなった。今後、遺跡の広がりを捉えるために、緩斜面側にも調査区を広げる必要がある。

(2) 石核出土

第3次調査ではA1拡張区から、3点の石核が集中して出土した。図15・図16は3点の石核の出土状況である。平面的な分布は110cm、立体的な分布は30cmの広がりを持っている。13(図10)が上部、14(図11)が中部、15(図12)が下部で出土した。13は、石器の上部は根による攪乱土(2層)、石器の下部は3層に達していた。14、15は3層から出土した。

出土した際の石核の向きは、13、15が打面を下にした状態、14のものが打面を上にした状態で出土している。特に14のものは縦に長く、何も固定せず石核を放置すれば、長辺が地面と水平な状態になる。しかし、長辺が地面と垂直、つまり「立った」状態で出土している。今回の調査では、石核を垂直に固定するための何らかの掘り込みがある可能性を考慮して慎重に掘削を行った。しかし、ピット等は確認できなかったため、石核の位置関係や出土状況の把握のため、周囲を半裁し、写真撮影による記録に努めた。もちろん、これら石器の出土した向きに関しては、遺跡の原地形や埋没後の移動などを念頭に置かなければならない。特に、この石核が発掘されたA1拡張区は、立川遺跡が位置する舌状台地の先端に位置し、崖崩れなどの土砂の移動や凍結融解作用による埋没後の攪乱は大いに考えられよう。今後も、地点ごとの層位関係の把握や石器の出土状況の総合的な比較を行うことで、当時の遺跡内での空間利用の把握に努めたい。

北海道内で石核が集中して出土した遺跡として、湯の里4遺跡が挙げられる。湯の里4遺跡では、石核の集中出土箇所に顔料に起因すると予想される赤色土壌が確認されている。石核は蘭越型に類似するものが確認されており、これは立川遺跡出土のものと同様である。相伴する遺物として、垂飾・玉が確認されている(畑 1985)。今回の調査では、顔料関連遺物は出土しておらず、赤色に変化した土壌も確認できなかった。しかし、福井淳一氏は函館市博物館が行った立川遺跡発掘の出土遺物に顔料関連遺物を確認しており(福井 2001)、立川遺跡内での顔料の利用が想定される。また、垂飾・玉の出土も想定し掘削時には再三の注意を払ったものの、これを確認することはできなかった。



図15. 石核13・14出土状況



図16. 石核14・15出土状況

今後、石核が出土した A1 拡張区の周囲をさらに拡張することで、石核集中部の様相を明らかにするとともに、その位置づけについて検討したい。

(3) 石器集中部

A20拡張区では、第1次調査に引き続きチップや剥片が多量に出土した。これまでの調査において最も石器が出土している区画である。頁岩製・黒曜石製の有舌尖頭器も確認されている。これら有舌尖頭器は破損しているものがほとんどで、この石器集中部は有舌尖頭器をはじめとした石器製作址であることが考えられる。第1次調査では耕作土と考えられる2層を中心に石器の出

土を確認していたが、掘り下げを継続した結果、攪乱が起きていない3層からも石器が出土することが明らかとなった。しかし、掘り下げを継続しても石器の出土は続いており、未だ石器集中部の立体的・平面的な広がり終わりは確認できていない。より調査範囲を広げるとともに掘り下げを継続し、石器集中部の広がり確認を進める必要がある。

(4) 函館市博物館発掘区の位置

第3次調査において、A1拡張区にて函館市博物館発掘区のものと思われる掘り込みを確認した(図17)。舌状台地の先端部に位置するため、第I地点の発掘区であると予想されるものの(図18)、確証はなく、今後の調査が必要である。また、検出できた発掘跡が、第I地点のどの箇所か該当するかは不明である。今後、検出できた発掘跡の周辺を発掘し、第I地点の詳細な座標を確認したい。そして、第I地点から第IV地点が舌状台地のどこに該当するかを明らかにし、石器の様相が異なる地点ごとの遺跡利用の性格を把握に努める。また、函館市博物館発掘の際に出土した資料との関連性も比較検討を進めていく。

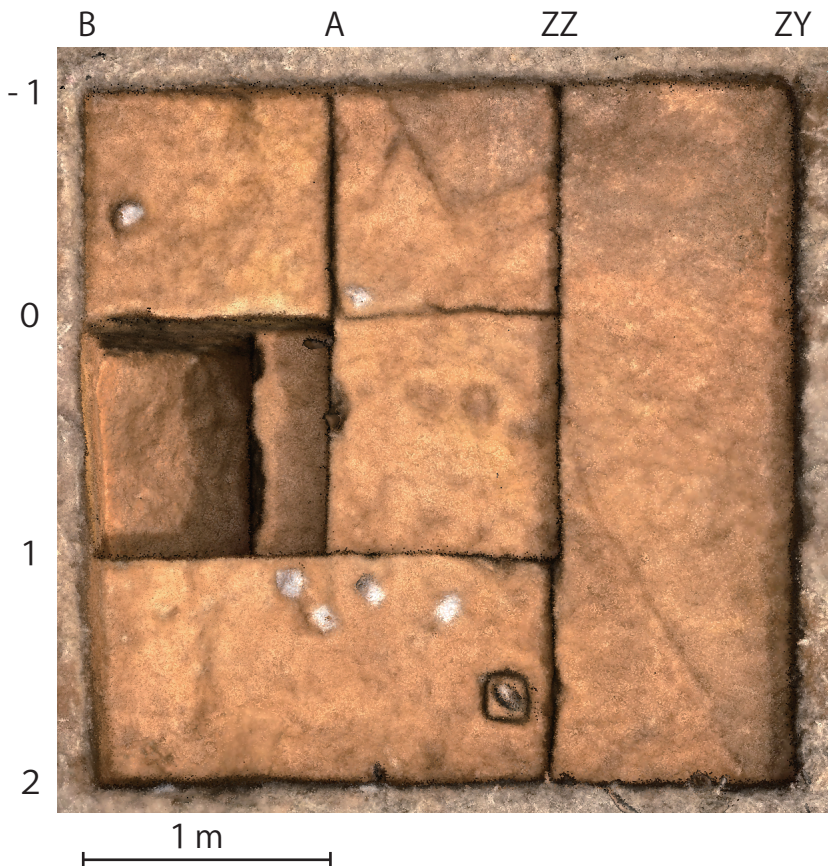


図17. 函館市博物館発掘区 (A1拡張区)

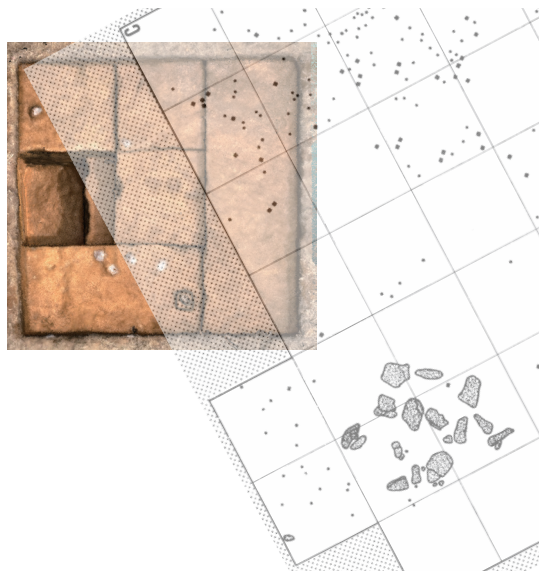


図18. 函館市博物館発掘区想定図

(5) 土器の出土

第1次調査において A30にて土器が出土していたが、第2次調査でも土器が出土した。しかし、耕作土である2層からの出土であり、プライマリーな層である3層からの出土は確認できていない。A20拡張区で耕作土よりも下層に縄文の包含層と考えられる黒色土層が確認され（図19）、今後の調査で石器と共伴して出土する可能性がある。



図19. 黒色土層検出状況（A20拡張区北壁）

おわりに

以上、北海道立川1遺跡第2次調査と第3次調査の概要を述べた。第1次調査では5平米を、第2次調査と第3次調査では合わせて29平米を調査した。依然として、わずかな調査範囲ではあるものの、石核の出土や石器集中部の広がり、舌状台地上での遺跡分布などを確認することができた。遺物の様相も複雑さを増し、立川1遺跡において細石刃石器群や有舌尖頭石器群の存在を改めて理解することができた。第1次調査概報でも述べたように、立川1遺跡にはまだ豊富な出土資料が期待できる。今後も調査を継続し、立川遺跡の詳細な様相の把握に努めたい。

最後になるが、第1次に引き続き今回の調査を許可していただいた地主の会澤 守さまに感謝したい。また、蘭越町教育委員会には調査にあたり機材などの借用に便宜をはかっていただいた。

引用・参考文献一覧

- 青木要祐 2018 「遠軽町タチカルシュナイ遺跡群の現代的意義」『北海道考古学』54
- 安斎正人 1996 『現代考古学』同成社
- 帯広市教育委員会 2006 『帯広市埋蔵文化財調査報告27：帯広・大正遺跡群2』
- 白石浩之 1989 『旧石器時代の石槍』東京大学出版会
- 芹沢長介 1954 「関東及中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」『駿台史学』第4号
- 高倉 純・鈴木健治 2017 「北海道ニセコ町西富遺跡の調査」第18回北アジア調査研究報告会発表
- 高倉 純 2018 『ニセコ町西富遺跡の調査と北海道南部の旧石器研究史』北海道旧石器文化研究会2017年度定例研究会発表
- 高倉 純 2020 「峠下型細石刃核再考」『日本考古学』50
- 寺崎康史 2006 「北海道の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』
- 千葉英一 1985 「北海道地方の細石器文化」『考古学ジャーナル』No.306
- 鶴丸俊明 1979 「北海道地方の細石刃文化」『駿台史学』第47号
- 長崎潤一・高倉 純・北村成世・田畑幸嗣・谷川 遼 2023 「北海道蘭越町立川1遺跡第1次調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第68輯、早稲田大学大学院文学研究科。
- 長沼正樹 2005 「日本列島における更新世終末期の考古学的研究：縄文文化起源論と旧石器時代終末期の学説史に着目して」『論集忍路子』1
- 夏木大吾 2017 『遠軽町タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点発掘調査概要報告書—2017年度調査—』
- 橋詰 潤 2009 「「刺突具」利用の変遷に関する一試論：新潟県域における杉久保石器群から縄文草創期の比較から」『新潟県の考古学』II
- 橋詰 潤 2015 「後期更新世末期の本州中央部における両面加工狩猟具利用の変遷」『第四紀研究』54(5)
- 橋本勝雄 1988 「縄文文化起源論」『論争・学説日本考古学』第2巻 雄山閣
- 畑 宏明 1985 「5. V層の遺構」『湯の里遺跡群—津軽海峡線（北海道方）建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書—』財団法人 北海道埋蔵文化財センター。
- 福井淳一 2001 「旧石器時代の顔料とその生産—北海道柏台1遺跡出土顔料関連遺物の分析を中心に—」『北海道考古学』第37輯、北海道考古学会。

北海道埋蔵文化財センター 1985 『今金町美利河 1 遺跡』

北海道埋蔵文化財センター 1999 『千歳市柏台 1 遺跡』

役重みゆき 2012 「蘭越型細石刃石器群の技術構造」『東京大学考古学研究室紀要』26

吉崎昌一 1959 「立川遺跡の出土状態と遺物」「結語」『立川 —北海道磯谷郡蘭越町立川遺跡における無土器文化の発掘調査—』市立函館博物館紀要 No.6

吉崎昌一 1978 「立川以後」『立川』復刻版別刷